國學院大學学術情報リポジトリ

神道研究の国際的ネットワーク形成：神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」 公開日: 2024-06-25 キーワード (Ja): 170.4, 神道‖シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 魯, 成煥, 色, 音, テーウェン, マーク, ブリーン, ジョン, ベンテリー, ジョン, ナカイ, ケイト, ヘイヴンズ, ノルマン, 遠藤, 潤, 平藤, 喜久子, 武井, 順介, シッケタンツ, エリック, 加藤, 里美, 加瀬, 直弥, 松本, 久史, 真田, 治子, 稲場, 圭信, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000506

セッション1

神道研究における日韓協力方案

魯成煥

韓国 蔚山大学校教授

【司会（浅野）】　それでは早速ですが、最初の発題に入らせていただきます。司会を務めさせていただきます浅野春二と申します。よろしくお願いいたします。

まず、「神道研究における日韓協力方案」と題しまして、魯成煥先生に発題をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

発題

魯成煥

【魯】　おはようございます。韓国から参りました魯と申します。私は日本語があまり上手ではないので、間違ったところがあると思いますが、皆さんにご理解いただければ、と思います。

日本語で発表するのはあまり慣れておりませんので、緊張しております。このようなことを韓国の諺では「たたかれるのだったら早くたたかれろ」と言います。今日は運がよく、１番バッターで登場してきました。

今日、私が持ってきたテーマは「神道研究における日韓協力方案」というもので、どうすれば日韓の研究者たちが共同研究できるのかということを中心にお話させていただきます。

来日前、韓国の学生たちに、日本の代表的な宗教であります神道のイメージを聞いてみました。すると学生たちは、小泉さん、神社参拝、軍国主義、靖国神社、右翼、戦犯、天皇、日本のナショナリズムなど、さまざまな意見が出てきました。このような反応から見てもわかりますように、韓国人が見る日本の神道のイメージはとても否定的であります。それには理由があります。韓国では、日本の神道についてあまり知られておらず、もし知られていたとしても、教科書からの「強制的に行われた神社参拝」というイメージ、神道を代表する神社が靖国神社であるというイメージとして認識されているからであります。

これには研究者たちも一役買っています。彼らの研究テーマは主に「国家神道と靖国神社」とか、「明治政府（または朝鮮総督府）の宗教政策」とか、「日帝における日本神道の浸透」とか、「国家神道の危険性と信教の自由」などです。このようなタイトルを見ただけでも、神道がまるで天皇制国家のための宗教と思われてしまう可能性があります。ある研究者は「韓国人が日本人の宗教に関して理解していることは、ほとんどゼロに近い」と表現したことがあります。このような表現は正確ではありません。日本人の宗教には仏教もあり、キリスト教もあります。これらに関する研究は韓国では相当進んでおります。相互学術交流も活発に行われていると聞いております。しかし、神道をはじめ、神道系の新興宗教に限って言うならば、彼の話が正しいかもしれません。なぜなら神道に関する研究はほとんど行われていないからです。韓国では、指で数えられる程度の少数の研究者しか、神道研究をしていません。その研究も宗教学的な観点からのものが圧倒的に多いです。

神道研究の規模を拡大し、特に韓国との共同研究を模索しようとするとき、その視点は現在韓国で行われているような宗教学的な立場にとどまらず、より幅広く見る必要があると思います。神道という宗教は、特定の教祖もなく、教典もない生活宗教であります。それゆえ、それを理解するためには、歴史学はもちろん、民俗学、文化人類学など、さまざまな視点が必要だと思います。

そのためにまずやらなければならないことは、先ほど言及したような学生たちが持つ神道に対するイメージを払拭することです。つまり強制された神社参拝、右翼、戦犯、靖国神社、天皇という一連の言葉に刻まれているような国家神道的な要素を取り除くことであります。そうすると、神道の純粋な姿が韓国人にとっても理解できるようになるかもしれません。

日本で神道の国際的なネットワークを形成するためには、他の地域との比較研究は必要だと思います。どんなところが同じで、どこが違うのか。それがどういう意味を持っているのかを把握しないと、神道の普遍性と特殊性はわからないのではないかと思います。このような作業は、もしかすると距離的・文化的に遠く離れている西洋よりも、むしろ近い韓国との比較が効果的かもしれません。実際、両国は似ている部分が多いですので、比較しますと、細かいところまで把握することができるのではないかと思います。

国家神道という着物を脱いで神道を見た場合、韓国人の目に見える特徴は、信仰の形態、神話と祭儀、神楽、そして神社の社会的役割などです。これは韓国で疎外されている土着宗教とよく似ています。

「信仰」についてですが、神社に祀られている神々を見ますと、とても多様であります。日本人の職業の数だけ、神々がいるように見えます。もともと神であった存在もあれば、人間が死んで神になったケースもあります。また木や山、動物などが神になった場合もあります。まさに八百万神というように、すべてのものに神が宿っているように見えます。これらには、アニミズムがその基底にあることがすぐにわかると思います。そして神社で神が宿っていると言われている岩や木などには、必ずと言ってもよいほど、聖域を示す注連縄（しめなわ）が張ってあります。

こうした神道における外見的な特徴を見ますと、韓国の洞祭（村祭り）と巫俗（シャーマニズム）によく似ていることに気づきます。村には、守護神を祀っている祠と神木があります。そこには注連縄が張ってあり、決まった日には祭祀を行っています。その場所に巫堂（シャーマン）を呼んで、祭儀をやっている様子は、まさに神道の本来の姿のように見えます。ある研究者は、それを原神道と言うかもしれません。このように韓国にも日本と同じく、アニミズムを基礎とする村や個人的信仰があります。

実際、朝鮮時代中期までは、日本のように地域ごとに神祠がありました。その祭神は山とか川が神になったり、偉大な人物や怨霊たちが神になったりしています。例えば自然の神としては、紺岳山神、三角山神、白岳山神などがあります。その中で紺岳山神は、いまだに一番効き目のある神として祀られています。偉大な人物の神として羅州には高麗の惠宗という王様が、淳昌（スンチャン）というところには薛公倹などが神として祀られてい

ます。大関嶺（デワンリャン）には道日というお坊さんが神として祀られています。開城、今は北朝鮮ですが、そこには虎景が、高麗を建てた太祖、王建が神になっています。怨霊の神として、珍島では李永という人が神になっています。統営と済州島では崔栄（チェヨン）という人が神になっています。元々李永と崔栄は菅原道真のような怨霊として扱われていました。その性格が年月とともにだんだん失われ、後世になると、李永は疫病を治してくれる神に変わっていきます。その一方、崔栄は長寿、安寧と泰平の神に変わっていきました。その中で崔栄はいまだにシャーマンたちにとって一番効き目がある神として人気を集めております。

このように、韓国でも、自然や、人間が死んで神になることが多いです。もちろん、これらの祭祀は、郷吏（土着の勢力）たちが主宰者になり、シャーマンたちがとり行いました。これは村祭りのように見えます。このように韓国と日本とはよく似ています。

このようことから神道を日本独自のものではなく、満州、モンゴル、朝鮮半島の固有の信仰と同じようなものと見る認識が早くから韓国にはありました。例えば1920年、30年代に活躍した崔南善（チェ・ナムスン）は、満州、モンゴル地域、朝鮮半島、それから日本列島につながる宗教的共通点があるのではないかと考えました。その中の１つが神道です。今では日本独自のものと思われていますが、実際、満州、モンゴル地域ではシャーマニズムが、韓国では巫堂（巫俗）が神道と、崔によって定義されています。さらに彼はこれらを区分して、大陸神道、朝鮮神道、日本神道と定義しました。彼の定義に従いますと、日本の神道は列島で孤立したものではなく、満州、モンゴルという大陸、朝鮮半島とつながりを持つものだと言えます。

しかし、異なる点もあります。日本の神道は仏教寺院を意識して、神殿をつくり、神職という専門的な主宰者を輩出し、また体系化を図りました。さらに、それを国家が受け入れ、発展させました。ところが、韓国はそれと正反対の道を歩んできました。特に朝鮮時代に入って、正確にいいますと、文禄・慶長の役以降、中国から入ってきた性理学（朱子学）が生活と学問の中心になることによって、祭儀は儒教的に変わりました。そのため神社は邪悪なものとして陰祀になります。また祀神も鬼として扱われ、権力者によって、惜しみなく捨てられてしまいました。つまりこれらは、愚かな人民を惑わす悪いものとして、この世にあってはならない撲滅の対象とみなされたのであります。済州島に行きますと、金寧洞窟という非常に有名な洞窟がありますが、そこには昔からヘビの神が祀られていました。そのヘビの神は、済州島に派遣されてきた中央官吏によって、その地域の神を率先して、退治される話がよく出てきます。土着の神々は退治の対象になってしまったのです。このような傾向は、今日も全く変わっておりません。

日本には、国学院、皇学館大学のように、神道学科が設置され、専門的な神職を育てる高等教育機関がありますが、韓国には、そのようなところは１カ所もありません。もしあるとしたら、土着宗教ではなく、新興宗教の建てた大学だろうと思います。一時、巫俗人（シャーマン）たちが巫俗大学をつくるという話があり、専門的な巫俗人を育てようという意見が出たことがありました。ところが、世の中から、その意見は物笑いにされました。

このように国家が神道的な要素を迷信と見て、それを打破する政策をとることにより、韓国の神々は衰落の道を歩み始めました。それで洞祭は支配階級の両班よりも、一般庶民たちが中心になって行うようになります。また宗教の司祭者の巫堂たちは、宗教的には神聖な存在でありながらも、社会的には差別を受ける矛盾した身分として扱われてしまいました。

このように、日本と韓国それぞれ違う歴史的な選択をすることによって、現在のように外見上全く異なるもののようになりました。私は、それ以前には日本と韓国はよく似ていたと思います。両国の信仰形態に対して現場調査と資料的な検討を通じて比較しますと、より具体的な日本神道の特徴を明らかにするのではないかと思います。

「神話」についてですが、日本の神道には数え切れないほど、神様がたくさんいらっしゃいます。それだけ神話がたくさんあります。古代神話としては、日本では『古事記』と『日本書紀』をはじめ、いろいろな文献に記録されております。韓国では『三国史記』と『三国遺事』にそれらが記録されております。このような文献を中心に日韓両国の研究者たちが比較研究をやっております。ある研究者たちは、それを通じて民族の移動経路を追跡し、またそれをもって韓国と日本はもともと同じ文化圏にあったのではないかという意見も出ております。このような研究のほとんどは文献中心です。

その上、韓国の文献は王権神話が中心になっていて、比較研究の大部分も、それが中心でした。しかし、日本神話の中には、国土生成神話をはじめ、神々の生成と穀物や死などの起源を説明する創世神話的な要素も多く含まれております。それゆえ、韓国でもこれに対する研究もやらなければならないと思います。ところが、この部分に対してはあまり研究されておりません。研究されたとしても、極めて少ないと思います。こうした創世神話に対しても比較研究が必要だと私は思います。そのためには文献だけではなく、口承資料まで比較対象を拡大しなければなりません。韓国の場合、最近、巫俗から多くの神話が発掘されております。日本でも、地域の神社の祭文から、新しい神話的資料が発見されています。こうした神話に対して比較研究が多少行われていますが、まだまだ不十分な状態にあると思います。このような神話を比較することによって、神道の神話が持つ性格をもっと明らかにできるのではないかと思います。

「祭儀と神楽」についてですが、信仰は神話を伴い、神話は祭儀を伴います。神話と祭儀の中でどっちが先か、私にはわかりません。それを究明することは、トリと卵、どちらが先かを問う問題と同じだと思います。神道も宗教である以上、祭儀がとても重要なことは言うまでもありません。その中で神楽は比較対象として非常に魅力的です。ところが、比較研究がほとんど行われていないと言っても過言ではありません。個人よりも、村の安定と秩序のために洞祭を行うときに、登場するシャーマンたちが歌って、踊って演ずる演劇的な要素は、日本の神社で行う神楽と同じではないかなと私は見ています。これに対する研究の必要性を早くから自覚した神話学者であります松前健先生は、周りの人々に比較研究を勧めましたが、いまだに満足できる成果は出ておりません。日本の神楽の特徴を明らかにするためにも、比較研究は必要でしょう。

そして「社会的機能」についてですが、日本の神道は日本人の生活と密接な関係を持っています。生まれて間もないうちに神社に参拝するし、また七五三といって、３歳、５歳、７歳のときに神社に行って、子供が無事に成長することをお祈りいたします。そして結婚式も神社で行う場合も多くあります。このように神社は成長に伴う、個人的な人生儀礼に関与するのですが、氏子たちによる集団的な祭儀（祭り）を行うことによって、村の安定を祈願したりもしています。これはまさに韓国の洞祭と巫堂の役割を見ているように感じられます。村人が中心になって行う洞祭は日本でいう祭儀と似ています。子供たちの無事な成長を祈るような個人的な人生儀礼は、巫俗、シャーマニズムが担っている。これは日本の神道における祭儀、人生儀礼の社会的役割とよく似ています。韓国には日本のような七五三はありませんが、毎年、七夕になったら、巫堂を訪ねて行って、子供たちの無事な成長を祈る風習があります。ここから神道の社会的機能と韓国の土着宗教の社会的機能と比較しますと、神道が持つ社会的な役割と意味がもっと明らかになると思われます。

「海を渡った神と神社」についてですが、日本における古代の神々の中には韓国から渡って行った神も多く、近現代に入ってからは韓国に渡って来た日本の神々も多くあります。これに関する日韓共同研究も必要ではないかと私は思います。

朝鮮半島から海を渡って日本に行った神々は、時代的に大きく分けて３つに分けられると思います。第１に古代であります。古代に多くの朝鮮半島の人々が日本に移住しました。それによって、彼らが信じていた神も一緒に渡って行ったケースであります。最も代表的な例がアメノヒボコ（天日矛）であろうと思います。彼は新羅の王子で、日本に逃げて来た奥さんを追いかけて海を渡り、日本に定着しました。彼らを祭っている神社もたくさんあります。その他、各地に分布している渡来系神社もたくさんあります。

２番目は、文禄・慶長の役のときに、多くの朝鮮人の捕虜たちが集団で日本に移住させられます。自分のところに日本風の神社を建て、韓国の神を祭る場合もありました。代表的な例として、鹿児島の朝鮮人の陶工たちが住んでいる村には、玉山神社があります。あそこには檀君が祭神として祭られております。韓国の国祖とも言える檀君が、日本風の神社に祀られています。

第３は、近代の植民地時代、あるいは戦後の経済の事情から、多くの人々が日本に移住しています。彼らは信仰の面からは、日本の宗教に満足できなかったことが多かったようです。彼らは経済的に豊かになるにしたがって、自分の故郷から神を迎え、祀り始めました。例えば大阪の生駒などで見られる韓国のシャーマンたちは、それだと思います。彼らはそれを通じて精神的な安らぎを求めています。現在は在日韓国人に限らず、日本人も時々訪れるのだそうです。最近は晋州というところに祀られている女性の神様、論介（ロンゲ）が日本人の手によって海を渡り、日本で祭られたことがあります。これは外交問題にまで広がりましたが、この詳細は質疑の時に説明する時間があれば、私が知っている限り説明させていただきたいと思います。

こういった韓国から日本に渡って行った神と神社を、一時、韓国では、政府研究機関であります韓国精神文化研究院というところで調査し、『民族大百科事典』を編纂するときに、

項目に入れて収録したことがあります。それを見ますと、韓国系神社と神の由来に関しては比較的詳しく説明しております。しかし、いかにして日本社会に定着し、どのように受け入れられ、地域民とどのような関係を結びながら、今日までに至っているのか。それに対する説明は十分だとは言えません。

一方、多くの日本の神々も海を渡って韓国へ来たことがあります。それらは主に２段階にかけて渡って来ました。第１は、植民地政策の一環として、日本人とともに神々の移住が始まりました。その結果、ソウルの朝鮮神宮をはじめ、各地域に多くの神社が建てられました。その影響か、神功皇后は、朝鮮総督府が出した教科書に一番頻繁に出てくる人物でございます。その神功皇后が朝鮮総督府の中央ホールの天井に壁画になっておりました。さらに天理教、神理教、大社教、扶桑教、神習教など、神道系の新興宗教も入って来ました。当然、それによって布教や祭儀も行われていたと思われます。

ところが、日本の敗戦による日本人の帰還とともに神々も帰って行きました。巨文島という西海岸にある島ですが、私が随分前に調査したことがありますが、そこに行きますと、現在まで「神社遊び」という遊びが残っておりました。それほど神社と村は大変密接な関係で結ばれていたことがわかります。そこには今も、当時建てられた鳥居の石が転がっていました。こういった植民地時代に渡った日本の神々に関わるものは、今では放置されているように見えています。

戦後、日韓国交正常化の後、再び日本の神々は海を渡り始めました。今度は植民地時代とは異なり、伝統的で土着な神々ではありませんでした。渡ってきたのは、新たに生まれた神々でした。その代表的な例は天理教だと思います。彼らは、日韓両国の暗い過去の歴史とともに、時々、ナショナリズムに訴えるマスコミの報道のために、厳しい環境のもとで布教しております。一部では、日本という看板を外して、土着化という名分を立てて、改革を図るところもあります。

このように韓国に渡った日本の神々が全くないとは言えません。今日、大変限られた神が渡ってきていますが、かつて植民地時代には数多くの神々が渡って来ました。主要な都市では、主にアマテラスオオミカミ（天照大神）と明治天皇が祀られることが多かったです。地方では、それとはまた違っていました。巨済島という島には金比羅様という神様が祭られていたのです。一体、彼らはどの地域から、どういう性格の人々によって渡って来たのか。また韓国人とは、どういう関係を結ばれて、どんな影響を与えたのか。また韓国人は日本の神社をどのように受けとめていたのか。それから、かつて神社であったところが、今日はどのように活用されているのかなど、調べてみるのもおもしろい研究テーマではないかと私は思います。

また現代になって渡って来た神様も同じだと思います。とりわけ、どういった人々によって持ち込まれ、どんな人々が入信し、また韓国社会に定着するために、どのような努力をしているのかを具体的に調べてみる必要もあると思います。これらは韓国人の努力だけで解決できることではありません。また日本の学者の努力だけでも不可能に近いと思います。つまり両国学者・研究者の協力が必要だと思います。そういった作業があってこそ、

日本神道の特徴の究明はもちろん、神道研究の国際化を図ることができるのではないかと思います。

最後にですが、国学院に望みたい個人的な考えですが、神道がどういうものなのか、さっき申し上げましたが、韓国人はよくわからないのです。韓国人にわかってもらうためには、共同研究とともに、一般人向けの作業も必要ではないかと思います。それには、次のような３つのことが考えられると思います。

１番目は、共同研究は宗教学のみならず、民俗学、人類学、歴史学など、多角的な視点が必要だと思います。その際、国学院の研究グループとの共同研究はもちろん、情報交換できる仕組みを整えてほしいと思います。実際、海外の日本研究者らが神道に関する信仰、神話、祭儀、民俗などを研究するために日本に行こうとするとき、どこに協力を求めたらよいのか、わからない場合がたくさんあります。そのとき、国学院から、適切な便宜を図っていただきますと、国学院は神道研究を海外に向かって発信する研究中心機関として位置づけられるのではないかと思います。

２番目は、神道を一般人にもわかってもらうためには、それに関係がある書籍を積極的に紹介する必要があると思います。現在、韓国では、その関係書があまりにも不足しております。書店に並んでいる神道に関する書籍は、朴奎泰さんが翻訳した『日本神道史』（村岡典嗣、1956年、創文社）や、李イフアさんが翻訳した『神道の逆襲』（菅野覚明、2001年、講談社）など、翻訳書が中心でして、韓国人が書いた著作としては朴奎泰さんが書いた『日本の神社』（2005年、サルリム出版）という非常に薄っぺらな文庫本しかありません。もちろんこれらの書籍は、日本神道の理解に役立っていることは事実でありますが、より多く書籍が出されなくてはならないと思います。特に専門的な書籍も必要でありますが、一般人にもわかりやすく書いた基礎的な書籍がもっと多量に必要であります。それらには神道がいかにして国家神道的な要素を持つようになったのかを紹介することも必要だと思いますが、それよりも、先に申し上げましたように、国家神道的な性格を抜け出し、純粋な日本人の生活宗教としての神道を紹介するのがもっと大切かもしれません。

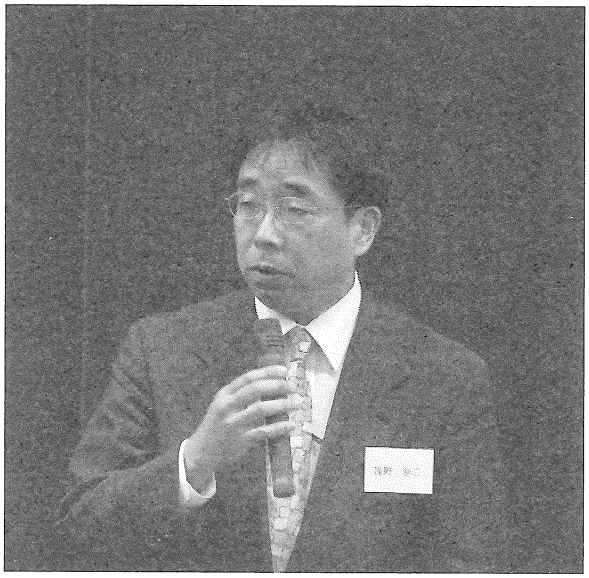
３番目は、積極的な翻訳の支援も１つの方法だと思います。当然でありますが、いくら優れた書籍を出版していても、その国の言葉で翻訳し、紹介する人がいないと、国際化を図ることができないと思います。そのためには、神道関係の書籍の翻訳に対して積極的に投資や支援を行う必要があると思います。

こういったことが総合的に行われ、韓国で神道に対する偏見のない理解が一般人や専門家らに拡大すると、韓国人も、過去の暗い歴史の色眼鏡を外して、素直な目で日本の神道を見るようになるのではないかと思います。

簡単でありますが、以上で私の発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

質疑応答

【司会（浅野）】　どうもありがとうございました。まず協力の必要性について、具体的な例を挙げて、いろいろお話しいただきました後で、協力関係の構築について３つほど、ご提言をいただいたと思います。時間が押しておりますが、活発な質疑をお願いしたいと思います。どなたでも何か質問がありましたら、お願いいたします。



【平藤】　国学院大学日本文化研究所の平藤です。私は専門が神話学なので、その関係でご質問させていただきたいと思います。

神話の比較研究の状況ということを先生はおっしゃったのですが、日本では、昔でいうと三品彰英などが日本と朝鮮の神話を研究していました。彼の場合も、戦前戦中までは、日本の神話は非常に独立的で、朝鮮の神話と似ているところもあるが、文化圏としては別だと言っていました。一方で、朝鮮はモンゴル、満州と同じ文化圏であると言っていました。それが戦後になると、やはり同じ文化圏だと言い方が変わるように、神話の比較研究には日韓の政治関係の影響が反映していて、結論が政治的理由で変わっていくことがあると思います。現在ですと、比較研究といっても、例えば韓国の場合、『三国遺事』などの資料が新しいので、日本の神話とは比較できないという人たちもいる状況ですが、客観的に比較して、文化圏を論じるという状況が難しい時代が続いてきたと思います。現在日本で、朝鮮と日本の神話の比較研究をやっている人はほとんどいない、あるいは非常に少ない状態です。韓国では、神話の比較に関する研究者がいるのかということと、そのような場合、政治的背景のない研究が意識されているのかどうか。つまり、韓国の研究者の場合は、今度は韓国から日本に影響を及ぼしたという研究が非常に多かったわけですね。やはりそこ

にはナショナリズムとの関係があると思うのですが、そのあたりを意識されているのかどうかということで、研究の現状をお聞きしたいと思います。

【魯】　1970年代の半ばころ、朴政権のときに、非常に学問的なシンボルとして韓国精神文化研究院――今は名前が変わりましたが――がつくられました。そのときに、今考えてみるとお恥ずかしいというか、笑いものになりますが、政治家や朴政権は韓国的民主主義という言葉をよく使いました。それが学問に影響を及ぼし、韓国文化の特徴を探そうという風潮が出てきました。日本の国学者のように、外来から入ってきた仏教の要素、儒教の要素、それを1つずつ取り除いてみると、韓国文化の特徴として残ったのはシャーマニズムでした。それが1970年代の半ばごろ、国文学とか、民俗学者たちによるシャーマニズムの研究が非常に盛んであった大きな原因があったと思います。

当時、私も韓国精神文化研究院の助手をやっていたのですが、『民族大百科事典』を見てもわかりますように、ナショナリズム的な傾向が非常に強くありました。1970年代、80年代の半ばごろまで、我々の先輩たちが主に考えていたのは、韓国の文化を海外に発信するならば、どこまで広がるだろうかということでした。このような関心のもとで、日本と韓国を比較すると、日本文化の源流は韓国にあるとなります。非常にコンプレックスめいた研究が多かったです。それは事実です。

ところが、最近は少し変わりつつあります。平藤さんがおっしゃったように、日本も比較研究者が少ないという状況です。韓国もそのような研究者は少ないです。ところが最近動き出した30代、40代、あるいは50代前半のグループが、5、6年前から、韓国の神話研究に関してかなり実績を積み重ねてきて、中国の研究者、韓国の神話研究者、日本の神話研究者たちが「東北アジアの神話の比較研究」というタイトルで、研究をしたケースがあります。それは、互いに影響関係を明らかにするという研究ではありませんでした。例えばそこには神話的な考え方、神話的な思考を明らかにしようという傾向がかなり強く出てきております。また影響関係を研究するときも、以前とは異なり、例えば中国の神話、中国の文化の要素が韓国に入って来たとすれば、韓国ではどのように変化していくのかということも扱うようになりました。また日本との比較をするならば、日本では、どのように変化していくのか。中国から入って来るならば、中国のどの部分が韓国社会に定着していくかと。非常に前とは違った形の具体的な研究が少しずつ行われております。

それからもう1つ、目立つ傾向としては、以前では王権神話や創世神話など漠然とした研究が多かったのですが、最近では非常に細かな研究が増えてきています。例えば死の起源神話なら、死の起源神話の説明方法に関して、日本と韓国ではどのように違うのか。なぜ違うのか。そういう具体的で、非常に細かなテーマに絞って研究が行われることがよくあります。

ところが残念なのですが、問題は日本に留学し、帰国してきた研究者の研究方法です。彼らは日本の影響があまりにも強過ぎて、日本人がやっている神話のテキストを正しく読もうという注釈作業を一生懸命やっています。これは韓国の神話研究者に、どのような影響を及ぼすのか。日本人と全く同じような結論を出し、発表していくという傾向が、若手

研究者たちには目立ちます。このような研究傾向は、韓国社会にどのように生かされるのか、私は興味をもって見ているところでございます。

【司会（浅野）】　ありがとうございました。平藤先生、よろしいですか。ほかにどなたか、いらっしゃいますか。

【井上】　魯成煥先生が前半におっしゃった韓国での神道のイメージが偏っていることに関して――これは次の色音さんの発表でも、おそらくこのような内容に関して言及されると思いますが――、靖国参拝に関することなどをみても、海外に流れる情報はどうしても国家神道的な側面が多くなると思います。ですが、実は日本の学生も同様で、あまり神社一般のことは知りません。これはむしろ世代の問題が関わっていて、今の若い世代が、一般的なそれぞれの国の宗教情報に疎くなっているというようなことも私は感じています。

このような偏りを是正するための方策については、最後におっしゃっていたのですが、一つ具体的に、このような偏りを少しでも変えていくための具体的なプロジェクト――調査や共同研究――がございましたら、お考えをお聞かせいただければと思います。

【魯】　実は最近の統計を見ますと、日本から韓国に来る観光客よりも、韓国から日本に行く観光客のほうが多いのだそうです。その観光客のほとんどが神社や寺に行くそうです。お寺は、韓国とは少し異なるところもありますが、仏教という共通点がありますので、見に行きます。しかし、神社に行っても、これは一体何なのかと。どういう形で参拝するのか。またどんな神が祀られて、日本人はどのように神社とかかわりを持って生活をしているのかという基本的な要素さえわからないのです。このことに関して韓国人がわかろうとしていても、これに関する資料は韓国にはないですね。最近、幸いにも朴奎泰さんが日本学を専攻している学生に対して、日本宗教という科目で講義をやりながら、説明するための非常に入門的な本――『日本の神社』――を出版されました。これには神社は本殿があって、入り口にはなぜ鳥居があるのかなど、基本的なことが書かれています。一般の人たちは、鳥居がどういう意味なのか、どうして手を洗うのか、神社ではどのように参拝するのか、どうして注連縄が張ってあるのかとなど、日本人はよく知っているかもしれないですが、最初の異文化体験ですので、そういうことをわかりやすく説明する方法、概論書が必要です。

来日前に、日本に旅行経験のある歴史家の同僚にいろいろ聞いてみました。神社に行ったことがあるか聞いてみると、ほとんどの人が神社に行っているようです。ですが、神社の役割というのはよくわからない。ある先生は「私は板に何かを書いて――多分、絵馬だと思うのですが――、掛けていたら、非常に効き目があって、自分の子供がいい大学に合格したよ」と言うんですね。おそらく天満宮に行ったのかなと思うのですが、これをみると、靖国神社や国家神道という概念ではなく、偏見なく普通の日本人の生活宗教として見ているのですね。日本人の行動をみて、自分もやってみようと。では、絵馬はどういう意味なのかと。神社の構造、建物、鳥居など――日本人は常識だと思っていますが――は、日本人以外が見てもよくわからないものです。それを説明するプロセスがあればよいと思います。これらには国家神道的な要素もありますが、ごく一部に過ぎないと思います。素直

な日本人の宗教、神社を中心とした信仰といいますか、それを偏見なしで見ることができるのではないかと思います。一般人の目から見てという共同作業をやる必要があると思いますね。

【司会（浅野）】　ありがとうございました。そろそろ時間がまいりましたので、これにて終わらせていただきます。魯先生、どうもありがとうございました。（拍手）